

2024 年度 夏期伝道実習説教 ルカによる福音書 1 章 5～25 節
説教題：「沈黙の中で」

「何によって、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

先ほど皆様と共に聴いた今朝の聖書の御言葉です。妻エリサベトの受胎告知を受けたザカリアの応答を受けて、天使ガブリエルはこう答えました。すなわち「あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかったからである。」

わたしは小学生の時、アドベントの時期にこの聖書箇所を教会学校で聴いて、ガブリエルはなんと恐ろしい天使なのだろう！と思いました。またザカリアはなんて可哀想な人だろう！と子供ながらに同情しました。誰だって「いきなり観たこともない天使が目の前に現れたら、幽霊のように驚くじゃないか！」子供ながらにそう考えたと思います。

しかし今朝の説教準備を通して次の様に考えました。すなわち、バプテスマのヨハネを授かる妻エリサベトとザカリア老夫婦、またザカリア自身も口が利けなくなって、本当に不幸だったのだろうか？と。今朝は、その事も覚えつつ、御言葉からのメッセージを皆様と分かち合いたいと思います。

まず、この老夫婦の当時の状況から見ていきたいと思います。ザカリアは安息日から安息日までの一週ずつ神殿に仕えるアビヤ組の祭司でした。当時はその様な祭司が 24 組おり、彼は 8 番目の組の祭司であったようです。また妻のエリサベトもアロン家、つまりあのモーセの兄弟アロンの家系ですから二人とも祭司としての血筋という点では申し分なかったと考えられます。また 6 節で記されている通り「**神の前で正しく、掟と定めをすべてまもり、非のうちどころがなかった。**」と記されています。しかしこの老夫婦には子どもがいまませんでした。主イエスの公生涯の時に限らず、旧約時代からの男性優位のユダヤ社会において、この子ども、特に血筋として後を継ぐ、男の子がないと言うことは女性にとって重大事でした。社会的、また個人の心理的な面においても特別な事でした。古くからの旧約の時代から個々の同じような具体例を思い浮かべる方もおられるかもしれません。アブラハムとサラ、イサクとリベカ、ヤコブとラケル、そしてエルカナと預言者サムエルの母ハンナの物語などです。子をもうけることは逆に当時のユダヤ社会に於いて大きな祝福と考えられました。それは家名を存続させ、イスラエルと神との契約を永続させることを意味したからです。

しかし逆の見方において考えるなら、不妊は悲劇、不名誉、さらには神の罰のしるしとさえ見做されたのです。この点に於いては祭司職としての出自は申し分のなかったこの二人の老夫婦においても同じです。その苦痛、悲しみがいかばかりであったでしょうか？現代の日本社会に住む戦後生まれの私の世代では正直、想像の範囲を超える事柄です。しかしその悲劇、不名誉は栄えあるユダヤ教の祭司職にあったザカリアと妻エリサベトの場合も例外ではなかったであろうと想像は出来ます。もしかしたら戦前の日本以上のものかもしれません。日本でも特に戦前においてはそうであったとも聞きます。いわゆる「家名を継ぐ」などと言いますね。しかし当時のユダヤ社会で世継ぎは唯一絶対の存在である神からの預かり者でありました。そして時としてようやく生まれた子どもは神への捧げ者ともなったのです。ハンナの場合のサムエルが正にそうでした。祭司であり預言者でもある、あのサムエルがそうでした。彼はハンナの元で乳離れしてから、祭司エリに預けられたのです。

さて、ザカリアの事にお話しを戻します。口が利けなくなる。ザカリアの聖所での奉仕が終わるのを待っていた民衆もただならぬ事が起こったと考えたかもしれません。21節では「**手間取るのを、不思議に思っていた。**」と記されています。そして聖所から出てきたザカリアの異変に気付きます。続いて22節では「**聖所で幻を見たのだと悟った。**」とも記されています。またザカリアは人々に「**身振りで示す**」とも記されていますが、彼はその時どのような表情、姿だったのでしょうか？そして家に帰ってから妻エリサベトが身ごもるまで、どのような日常生活を送っていたのでしょうか。

その間、二人の間でザカリアは筆談でエリサベトとコミュニケーションを取っていたのかもしれませんが。その時のやり取りを含めて、この二人の、少なくとも口が利けないザカリアからみれば、「沈黙の時間」が以前よりも多くもたらされたのは間違いありません。

この老夫婦が普段、会話の多い生活であったのか、そうではなかったのか、聖書からうかがい知ることは出来ません。しかし確かなことは男の子が、バプテスマのヨハネが、聖所での出来事を通して与えられると二人は知らされました。二人の間でそれが共有されました。以前とは違って会話が成り立たないこの老夫婦の間です。「ふたりだけの沈黙の間」が出来たのです。

さて、お話しを現代の私たちへと変えます。私たちは普段の日常生活で、特に家の外の世界でこの他者との「沈黙の間」を避けようとする傾向が有るのではないのでしょうか。特に初対面の人と例えば、同じ空間、部屋などで同席する時はどうでしょうか？おそらく自然と居心地の悪さを感じる事が多いと思います。

よくその様な時、「間が持たない」と表現する事があります。またそれとは逆にお互いに気心が知れた者どうしでは「沈黙の間」を逆に居心地良く感じることも有ると思います。特に現代の日本で、(あるいは他国でもそうかもしれませんが、) 著しい騒音に満ちた私たちの生活空間ではどうでしょうか？この世界に在ってあえて沈黙、静寂の時を持つことは一つのリラックス効果をもたらすとさえ最近耳にします。静寂の中で「無心」になる。たとえて言うなら、仏教の「禅」の世界もそれに近いのかもしれません。

また気心が知れている仲の良い対人関係においては「以心伝心」という感性が言葉として日本では用いられません。日本人的な感覚がそのままキリスト教的な世界には当てはまらないかもしれません。しかし主イエスが説く「神の国運動」の先導役、このバプテスマのヨハネを授かった老夫婦の間でもこの大いなる喜びを二人は沈黙の間に、静かに、しかしじっくり囁みしめるように共有していたのではないかと想像するのです。

なぜなら1章39～45節においてマリアの来訪を受けてエリサベトは体内で喜び踊る子を感じ取ったからです。そして「**主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう。**」と彼女は言いました。エリサベトはマリアと自らに主が為された業を率直にこう言葉にしているのです。また同じくザカリアは67節からは「ザカリアの預言」として神である主を声高らかに賛美しています。

翻って私たち信仰者も喧噪に満ちたこの世において「沈黙の中で」、このような主なる神のそれぞれに確かに与えられる祝福を静かに、しかししっかりと囁みしめたいと思うのです。

スイスの医師、著述家でマックス・ピカートという人がおりました。彼は『沈黙の世界』（みすず書房）という著作の中でこう述べています。「沈黙は決して消極的なものではない。沈黙とは単に『語らざる事』ではない。沈黙は一つの積極的なもの、一つの充実した世界として独立自存しているものなのである」（9頁）と述べました。さらに彼は深く愛し合っている者同士の間には存在する沈黙について、こう語っています。「愛のなかには言葉よりも多くの沈黙がある。……愛し合う二人の人間の言葉は沈黙を増大する。沈黙は彼らの言葉のもとで増加する。」（104頁）これはこのザカリアとエリサベトの間でも恐らく成立した事ではないかと想像するのです。彼ら二人はやがて生まれてくるバプテスマのヨハネを「沈黙の中で」待ち望んでいました。またこの事は、聖書世界においてのこの老夫婦にだけ起こる事ではないと思うのです。教会に連なる気心の知れた信徒同士でもそうです。会話の間（ま）に起こる「沈黙の中で」同じような経験を持った方もおられると思うのです。

二人、三人の集まる信徒同士の間において、さらには日毎の祈りを通して、私たちは真に主イエスに、父なる神に自らの想いを伝える時を思い浮かべて下さい。私たちは沈黙の中で知らず知らずに主に対しての豊かな応答の時間を持つことが有るのではないのでしょうか？

しかしその反面、年齢を重ねることによって私たちは心も体も変化していきます。また私たちは日々の日常生活を、あるいは主日の礼拝を単なる経験の蓄積として漫然と過ごしやすい事も無視出来ません。年齢を重ねる、年を取るということは精神の活動性の低下を招きます。これはある意味仕方のない事かもしれません。私事になってしまいますが、私は今、58歳です。

おしなべて感じるに10代、20代、30代の頃の様々に新しく出逢う経験を受容性豊かに受け入れていた時期を思い浮かべます。またその頃を自ら羨む気持ちさえ時折、持ちます。

しかしそれは聖書を通しての信仰観で見れば、普遍的な現実・真実ではないのです。

先ほど触れたアブラハムとサラ、イサクとリベカ、ヤコブとラケル、そしてエルカナと預言者サムエルの母ハンナの場合がそうでした。そして本日、御言葉を通して聴いた祭司ザカリアと妻エリサベトの場合が正にそうだったのではないのでしょうか。人生の経験値という人間の常識を神の為される業は遙かに超えているのです。そしてその神の業は人間には思いがけない時に起こります。人間の常識では起こり得ない事が確かに起こり得るのです。

2000年前のあの日、人生に一度まわってくるかどうかという、ザカリアは祭司としての栄えある神殿の務めの中にいました。しかし彼は天使ガブリエルからの喜ばしい知らせに対して、常識的な受け答えしか出来ませんでした。すなわち「わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」と。

しかし彼ら二人の老夫婦は思いも掛けない喜ばしい現実を神から授かりました。

これは 2000 年前の聖書という書物に描かれた単なる神話・物語に過ぎないのでしょうか？そうでは無いと思うのです。たとえ、そのような奇跡が今を生きる私たちに現実として起こらなかったとしてもです。

私たちは今、こうして別府不老町教会に集められ、共に心を合わせ、神を、主イエスを賛美し、礼拝を献げています。比較的若い方だけでなく、年配の方だからこそ、この礼拝での賛美は今も、また今以降も変わりません。そしてたとえその場所がこの世ではない御国においても永遠に変わることはないのです！そしてその場の中に在って、私たち一人一人は神さまから選ばれました。そして召された者としてこの静けさの中にいます。この礼拝の、沈黙の中でその歓びを噛みしめるのです。否、神の御国としての場であるこの瞬間のこの礼拝で既に皆さまお一人お一人はその歓びを受け取っているのではないのでしょうか？主に拠って生かされている事に感謝を覚えます。そしてまた主イエスに従う者として共にその幸いを感じ取る者でありたいと思います。

祈ります。

天のお父さま。御名を賛美いたします。今、こうして別府不老町教会で貴方の御前で、イエス様を通して、礼拝を献げられる恵みに感謝いたします。

今日はルカ福音書 1 章からみことばに聴きました。私たちはとかく年齢が若くない、年を取っているからと、あなたからの祝福の恵みを素直に受け入れない事が多く有ります。ザカリアがそうでした。しかし、あなたは私たちが持つ常識を遙かに超えて、恵みの祝福を豊かに与えて下さります。どうかそんな私たちがたたくなな心を打ち砕いて下さい。そしてあなたから与えられるその幸いを素直に受け入れる信仰を与えて下さい。お願い致します。

すべての事に感謝して、イエス様の御名によって祈ります。アーメン